

# 振興トピックス

このコーナーでは、主に電源地域の地域活性化に向けたソフト事業の話題を取り上げています。今回は佐賀県玄海町、福井県美浜町、北海道神恵内村の取り組み、当財団が実施した福島12市町村の復興交流研修について紹介します。



地域おこし団体『玄海ホットランナー』

## 新しい地域おこし団体による 特産品が誕生

佐賀県玄海町  
地図 A

玄海町の「ふるさと応援寄附金事業」は、全国で寄附額2位となった平成26年から現在まで、たくさんの方々から支持を受けています。特に、高額の寄附者に提供される『Premium Genkai』は、定期便プランの先駆けでもあり、「元祖・定期便」として非常に高いリピート率で大人気となっております。玄海町の高い支持率を物語っています。

昨年5月には、20社以上の参加事業者のうちの1人が、地域おこし団体『玄海ホットランナー』を結成し、玄海町をさらに盛り上げて行くための活動を開始しました。

はじめました。地元の特産品を使ったサイダーやスムージーの開発、地元イベントへの出店・販売など、精力的に活動しています。

また、玄海町では新たな特産品を作るべく「クラウドファンディング」を活用して、玄海町の棚田米を使った特別純米酒「音音（ねおん）」を製作しました。多くの寄附者からの寄附で、無事お酒は完成し、現在では製造して4年目を迎えます。食用米ならではの甘みで、まろやかかつすっきりとした味わいとなっています。



「クラウドファンディング」で製作した『音音』

定期便プラン「Premium Genkai」

一昨年度実施した「全国棚田サミット」でもこの音音を配布し、好評を博したようです。こうした機会やふるさと納税を通して、この音音が町民の誇れる特産品となっていくことが期待されています。

玄海町では、寄附を集めるだけではなく、ふるさと納税を契機に、事業者がお礼品を提供する中で培ったノウハウや知見を活かした、「次に繋がる取り組み」

## 「相互友好協定」で 大学との連携強化を推進

福井県美浜町  
地図 B

「み」が見え始めているようです。「応援して下さる寄附者様のおかげで、地元の事業者も自分たちの産品に自信を持つことができました。今では新しいお礼品の提案も格段に増え、ふるさと納税によって町が活性化しているのを感じており、この流れを絶やさず、事業者への支援に全力で取り組んでいきます」と、玄海町の担当者は語りま

本年6月30日、美浜町は神奈川県横浜商科大学と相互友好協定を結びました。この協定は、観光振興や産業振興、人材育成の各分野で行政と大学が協力するもので、今後、横浜商科大学の学生インターンシップの受け入れや、町職員等の同大学への派遣等で、お互いの発展に繋げることを目的としています。

美浜町ではこれまで、観光開発において、観光資源調査や観光振興計画策定業務などで、同大学の商学部長である羽田耕治教授との繋がりがありました。今回の協定締結では、組織としての連携体制を整えて、観光振興、産業振興、人材育成等の各分野で繋がりを深め、商工業におけるマーケティング調査やビジネスの方向性を探るなど、交流人口の拡大やインバウンドにおいて、一層の地域活性化を図るものとなっています。



本年6月の調印式

光資源のPRの指導をいただけることや、町の人材を大学に派遣できることに、大いに期待しています」と述べました。

が豊富で将来性のある地域です。今後、本学の学生が美浜町の豊かな観光資源を肌で感じ、実践力をつけることや、本学に興味を持った美浜町の若い人が本学で学び、美浜町にUターン就職すること等で、お互いに発展し

## 『神恵内村魅力創造研究会』から地域の魅力を発信

北海道神恵内村

地図

北海道の積丹半島に位置する神恵内村。日本海に面し、美しい自然と豊かな海の幸が自慢のこの地域でも、若者が地域を離れ、人口減少が進んでいます。そんななか、「自分たちの地元

に活気を取り戻したい」という共通認識を持った村出身の6人の若者が「神恵内村魅力創造研究会」として活躍しています。平成24年9月に設立した研究会は、今年9月で6年目に突入り、現在は24名の若者が活動

担っています。

会の活動はSNSによる観光・特産品情報の発信や、絶景・景勝の写真掲載からスタートしました。当初は1か月100人の「いいね」を目標としてきましたが、今では2,000人を超えています。地元にとっては当たり前前のことでも、外の人の

復活した盆踊り

イベントでのおでん販売



っては魅力になることに気がつき、開設以来、毎日欠かさずに情報を更新しています。近年では、情報発信にとどまらず、郷土の文化伝承にも取り組んでいます。最近では、食べる機会が減ってきた村のソウル

フード「マスカレー」の復活。普及のため、道の駅での販売イベントを実施しました。また、村独自の歌詞と振り付けのある「神恵内音頭」の伝承のため、研究会の

ていくことを期待しています」と話されました。

全国各地で、自治体と大学の「連携」が進められています。このような「更なる連携強化」が、今後ますます増加すると思われま



神恵内村魅力創造研究会の皆さん

メンバーが地域のお年寄りに盆踊りを教えていただき、22年ぶりに盆踊りを復活させました。人口約900人の神恵内村で、5回目となる今年の盆踊りは500人以上が集まり、会場にぎわいに包まれました。今後は、研究会単独での活動だけでなく、他町村の団体との交流・連携も図りながら、村の魅力の掘り起しと地域活性化に取り組んでいくとのこと。地元

## 被災自治体の若手職員を対象にした交流研修

福島県

地図

電源地域振興センターでは、東日本大震災に伴う原子力発電所事故により、被災した自治体の若手職員を対象とした研修を行っており、本年度も宮城県石巻市と東松島市において、8月29日～30日の2日間にわたって開催いたしました。

初日は「エコで災害に強いまちづくり」をテーマに、「東松島スマート防災エコタウン」を見学。通常時はエリア内に設置された太陽光発電所の電力を地産地消し、災害時など外部電源が途絶えた時でも蓄電池から当面必要な電力を自給できる、「スマートグリッド」を取り入れた災害に強いまちづくりについて学びました。

その後「復興まちづくりと地域エネルギーシステム」について、東北大学大学院工学研究科教授の中田俊彦氏より、地球規模の視野で考え、地域視点で行動する考え方に立ち、地域エネルギーシステムをデザインする必要性について講義をうけました。夜には参加者同士の交流を深めるため情報交換会も開催しました。

2日目は「住民交流の場づくり」をテーマに、石巻市の「川

の上・百俵館」を見学。「石巻川の上プロジェクト」の三浦信行氏と鳥羽真氏から、「まちを耕し、ひとをはぐくむ」という理念を掲げた同プロジェクトが、もともと住んでいる住民の方と集団移転してくる住民の方とのコミュニケーションのため、どのような取り組みを行ったのか、お話を伺いました。

午後からは、空き家をリノベーションし従来型にない住環境・商空間を用意し、新たな需要層となる人居希望者と大家さんをマッチングするという事業モデルについて、合同会社巻組の渡邊享子氏に、実際に街なかの建物をご案内いただきながら説明を受けました。

参加された方からは、新鮮な思考を与えてくれる素敵な研修だ等の感想が寄せられました。今後の業務に活かしていただければ幸いです。



「エコで災害に強いまちづくり」を学ぶ